



國家圖書館編

東亞同文書院

中國調查手稿叢刊

130

國家圖書館出版社

六月四日

六月三日



國家出版基金項目
NATIONAL PUBLICATION FOUNDATION

國家圖書館
編

東亞同文書院
中國調查手稿叢刊

130

國家圖書館出版社

第一三〇冊目錄

昭和五年（一九三〇）調查報告（第二十七期生）

英領馬來對本邦貿易狀況

英屬馬來對我國貿易狀況

廣東ニ於ケル貿易

廣東的貿易

四川省ニ於ケル豚毛調査

四川省的豬鬃調査

江蘇、四川、湖北ノ蠶絲業

江蘇、四川、湖北の蠶絲業

德岡照

第三十四卷

..... 一

成田英一

第三十五卷

..... 五三

中濱三郎

第三十六卷

..... 一三三

宇敷正章

第三十七卷

..... 一六三

在滿鮮人問題卜間島警備ノ史的考察
滿洲的朝鮮人和間島警備的歷史考察

福山壽 第三十八卷 三四一

山東省に於ける漁業

山東省的漁業

伴重雄 第三十九卷 四六五

山西省の棉花事情

山西省的棉花情況

楠本一夫 第四十卷 五八五

旅行調查報告

英領馬來對本邦貿易狀況

貳十七期生

徳岡 照

第一章

序論

第二章

本論

上海同業
書局印

卷 英領馬來對本邦貿易狀況

第一章 序 論

外貿易政策の重點は南洋方面に下まつゝある事實を具體
的に過去及現在の貿易狀態に因て知る事は、私が旅行調査報告に本
題目を選定した結果當然の序説すべき必要があると思ふ。
今最近の對外貿易狀況を見るに、

日本内地對世界貿易高(單位千円)

貿易先		輸出		輸入	
	昭和三年		昭和二年		昭和三年
亞細亞	八三四、九三五	八四四、五三四	九〇三、一四四	八七二、九一一	
歐羅巴	一六〇、三四六	一四七、八九二	四〇三、七〇三	三八七、七四〇	
北亞米利加	八五八、五九八	八六六、七四九	六九三、九七三	七三九、九七三	
南亞米利加	二一、一三〇	二〇、八八六	一、一九九	一〇、四七八	
阿弗利加	四三、九二四	五一、二三五	三二、二〇九	三六、四〇二	

大洋洲

五三、〇二一

六一、〇二二

一三六、五九六

一二七、一二五

合計

一九七一、九五五

一九九二、三三七

二、八八、四七二

二、七四、七三九

右表を見るに、我が邦の輸出貿易は亞細亞と北亞米利加にて約八割五分を占め、他は殆ど顧るべき價値の少ないものである。北亞米利加と亞細亞との割合は茲三三箇年殆ど伯仲の勢力を述べてゐる。而して北亞米利加には何等なる債務の輸出をしてゐるかと見るに生絲が總輸出額の約八割強を占め、其他は絹織物の一千五百萬圓程度と筆頭に陶磁器千三百萬圓、茶葉千萬圓、茶九百萬圓、除虫菊の六百萬圓程度で、他は数あるに足らない數字を示してゐる。要するに北亞米利加に対する我が輸出は生絲が一主義で進み、他には方法が無い。何故なら生絲は他外國へ殆ど輸出を見ざる結果市價変動が相互激烈である。舉例すれば大正三年には百廿四圓の相場を保持したものが大正七、八年には四十四圓に暴落した。是れが戦後の不況以來漸次を続け、遂に大正三年頃には七十四圓に暴落し、現存争ひして四十四圓を上下してゐる。生絲以外のものは

生絲の市價の變動より受ける損益に比較しても問題に無うない。殊に在來の従ての貨物か何れも家内工業品のもので利鞘の僅少なものであるし又他に貨物を換へても考へても餘り多くを期待し得ないのである。

繇つて對亞細亞貿易の狀態を考察するに亞細亞は地理的に見ても面積は北亞米利加の一八倍に相當し人口亦六億に達し吾國の輸出品は北米の如く綿織物、綿布、綿絲、絹織物を筆頭に精糖、石灰、メカス、陶磁器、紙類、水産物、小麦粉等を大宗品として支那、印度、南洋の大市場に諸外國貨と猛烈な競争を展開し一進一退の情勢を繰返してあるも過去十年以來と異り、今や吾國市場に全く強國なる地盤を確保し之を維持してあるのである。殊に吾國は地理的關係に於て英、米、獨、佛の諸國に比し頗る優位を占めてゐるが故に國家の貿易政策及國民の努力如何に依るは之等市場の趣味流行を完全に支配し従て諸外國市場競争者を漸次驅逐する事も敢て至難では無いと思はれる。

歐羅巴及大洋洲への進出は將來相當の見込ありとする。貿易額を數億に達せしむる事は困難な事情が伏在する。故に吾國は米國への生絲は勿論之等諸國に對する貿易の振興を計るの必要はあるが特に支那印度南洋諸國に全力を注傾し、販路の擴張に努力するが要であり且有利である。

更に輸入に就て見るも北亞米利加亞細亞並に歐羅巴は總輸入高の九割強を占めてゐる。而して亞細亞東方一位の四割五分を第一位に北米の約三割五分、欧州の約二割を第三位とてゐる。其他は太平洋の羊毛に注視すべき要あるも他は殆ど問題にならない。

今之等の地方より仰ぐ重要物資の輸入統計を擧げる。

品名	輸入	高 (單位千円)	主要相手國
	昭和二年	昭和三年	
實綿及縹綿	六二四、六三〇	五九四、九四一	米國、印度
銳鉄 レール 次 外の錢	一〇六、八九二	一二〇、〇九四	米國、英國

植絲纖維	二六、九三八	二七、八三一	比律賓
石炭	二七、五六二	三六、九七五	支那
毛織糸	三三、四八二	三三、一〇七	獨乙
護謨	四〇、〇一〇	二七、八九五	海峽殖民地
粗製硫酸母	四四、九六二	三六、三〇三	獨乙、英國
米及粗	五〇、六九四	三三、六七二	暹羅、佛領印度支那
豆類	六一、三九二	六七、八五七	支那
板板皮部分品	七九、七〇一	七一、五八一	米國、英國
砂糖	八三、六七二	七五、八〇四	葡領印度
羊毛	八六、〇二四	一〇一、六七六	澳洲、亞弗利加
小麥	九三、三四六	五三、九二九	加奈陀、米國
油糟	一二四、一四三	九八、九七九	加支那
木材	一〇三、八〇五	一一一、〇〇八	米國、露西亞

採油原料

二九、四八五

二一、八一

支那

右表重要物資を大局より見る時は、熱帯産は表中四割五分を占め
て居る。即ち實棉及纈棉、砂糖、米、及穀、護謨、植民地纖維等は、

他の五割五分は、寧ろ、熱帯及温帯産である。所謂熱帯を支配するものは、世
界を支配すると稱した右人の言を借りても、本表に依る熱帯産物
資の如何に重要なるかを推知し得る。

殊に我國にとりて最も重要なる物資棉花は、米國及印度の熱帯地方
に砂糖、護謨、植物纖維等は、南洋に之を求めねばならぬ。又最近鐵材の
需用増大せるが不安定なる支那の鐵鑛と南洋に采掘へ更に石油、
石灰に就き之を南洋に求めんとしつゝある傾向にある。

上述せるところから、對南洋貿易の重要性を知るも、殊に對南洋貿易中
注目すべきは、英領馬來を示す貿易状況である。今南洋に於ける貿易
状況を表示すれば次の如くである。

南洋貿易概況（通商局の報告に依る。単位百萬円）

地方

一九二八年

一九二七年

一九二八年

一九二七年

英領馬來

一、〇〇二

一、一九〇

九七七

一、二二九

荷領東印度

八〇二

七六〇

一、二一一

一、三六三

比律賓

二七八

二三一

二二一

三一九

佛領印度支那

—

二一八

—

二五〇

暹羅

一七五

一五二

二〇〇

二一四

合計

—

二、五四〇

—

三、三七七

右表に依て推知し得るか如く南洋貿易は英領馬來・荷領東印度・比律賓・佛領印度支那・暹羅に依て其大宗を占め、其他諸國は殆ど同額となり得ない。標本食料を數字を以て示すのである。而も之の英馬及蘭印は貿易貨物の大部分を以て海峡殖民地の新嘉坡を中継して諸外國と貿易する実状に在り、新嘉坡に於ける貿易統計數字を知る事即ち南洋諸國

の貿易状況の概況を知る手段である。

然レ現今蘭領印度諸島は自國物産品の輸出と新嘉坡の中心に依るより直接之を行ふと有利とするの說勢力を得漸時之か実現を期してあると云ふ新嘉坡の持つ地理的優越の地位と商港としての歴史は今後數年尚新嘉坡の生命を維持し従て該港を研究の對照とするも南洋諸國の貿易概況を知るに價值あるものと斷斷し得る。

從來我國海外貿易の重要點は米國及支那に在り貿易業者の多くも亦貿易統計に表示する^{南洋の}絶対的壓倒的數字に幻惑未だ來共他南洋方面への考察點配慮を怠却せるか如き感あり。然るに最近數年間に於ける南洋地方土人の文化開發の程度は半製品を主とする日本商品の最も好適な購買品となし殊に我國に有する地理的優位の條件は南洋市場に日本貨物の旗を張る微約する。

今最近五個年間の本邦對南洋の貿易數字を掲げて見る。

日本より南洋への輸出統計 (單位千円)

國名	昭和二年	昭和元年	大正十四年	大正十三年	大正十一年
海峽殖民地	三六、六五七	四一、四九七	四四、九〇四	二六、七四二	二〇、九一七
蘭領印度	八二、五八一	七四、七五四	八五、五五六	五九、五三一	四〇、五九〇
佛領印度支那	五、八七三	六、二〇六	四、〇〇七	六、四三八	一、五五五
比律賓	三三、八三四	二七、八八一	二九、三〇五	二五、五〇七	一七、五三七
暹羅	二、一四六	九、二七〇	七、八二〇	四、一八一	三、八四二
合計	一五九、〇九一	一五九、五五八	一七二、六一二	一三二、九八二	一四四、四三七

右の統計に依て南洋の約三十二萬圓圓の輸入額に對して、僅かに七分七厘の食料なる割合を示してゐる事を知るのである。

然らば何故に我國が其販路地盤として最も優勝の條件を有してゐる結果を見るかは前述せる如く、^{従来}貿易者の恒目を引かず之を輕視し米國

及支那の貿易に偏重たる結果である。故に此処に本邦對馬來の貿易の状況の近況を記述して參考に供せんとする所である。

第二章 本 論

一九二九年度に於ける英領馬來對本邦貿易(小包郵便を除く商品貿易)は輸出総額 三六、六六七、六六弗(海峽殖民地)輸入総額は二三、一八八、一六弗にして差引総額一三、四八八、五〇の輸出超過に終つたが其の輸入総額を一々前年即一九二八年度の輸入総額と比較すると

一九二九年	一九二八年	差引増減
輸出額 三六、六六七、六六弗	三二、一八三、二七弗	増四、四八八、三九弗
輸入額 二三、一八八、一六弗	二〇、一四七、〇四二弗	増三、〇四一、七四弗
即ち輸出額 四百五十万弗	輸入総額 三百万弗	程の増加を示し